

## 授業改善書

科目名	西洋史特論 I (アメリカ史)
担当者	武市一成

### 授業の概要

アメリカ合衆国の歴史を、アメリカ史を学習する場合の基本概念を柱に継時的に学ぶ。「特論」とあるが、必ずしも、特定の狭いテーマに絞って講義したのではなく、通史的なアメリカ史の提示を心掛けた。また、年号や人名の暗記ではなく、歴史的なコンテキストを重視した。また、理解促進のために、政教分離規定や移民法など日本との状況を比較して論じた部分がある。

### 授業の問題点

ほおっておくと後ろのほうに座ってしまうので、極力前のほうに座らせ、教員を取り囲むような体裁にした。しかし、それでも、遅れてくる学生などが、後ろに座る傾向があった。どこの学校でもそうだが、学習意欲に学生間でバラツキがあるが、今回は最大18名であったので、全員参加させる方法を考える必要がある。視聴覚機器については、コンピューターを教務課で借りて、プロジェクターを持ち込むことになり、セットに時間がかかるなど、やや使い勝手が悪く、最初要領を得なかったので、以降は使用しなかった。

### 授業改善の課題・方策

視聴覚機器については、教室備え付けのDVDプレーヤーとテレビで格別問題はないが、材料によっては、コンピューターを使用し、スクリーンやモニター等に投影したほうがわかりやすいものもあり、この度使用した教室は、その点やや使い勝手が今一つであったと思う。しかし、教室自体は明るく、雰囲気は悪くなく、あまり視聴覚的なものに依存するのも大学の講義の在り方としては必ずしも好ましくなく、この辺りは、学生の人数や雰囲気によって、臨機応変に考えるべきものである。最初から授業に現れない学生はともかく、常に10分～20分遅刻する学生が数名おり、今回は必ずしも時間厳守を徹底しなかったが、この点改善が必要と考える。ただ、昨今の学生は、留学生など、それぞれが事情を抱えている場合があり、あまりうるさく言うと、却って学生をクラスから遠ざける要因になりかねないので、慎重に判断したい。毎回小テストのようなものを実施すべきかどうかについては、行ったほうが良いとも思うが、これは学生の出席の安定性とも関係があるので、要検討である。今回は、基本的事項を軸に、通史的に講義したが、もうすこしテーマを絞ったほうが、授業に一貫性が出てきて、焦点を結びやすいとも思うので、そういう方向を模索してみたい。いずれにせよ、大人数ではないので、学生に発言機会を与え、参加させることがなにより大切である。

### その他

昨今は、学生の態度や心の持ち方等に、大学間での差をあまり感じないが、今回受け持った学生は、当初思った以上に知的好奇心や関心が高く、教員のほうがそれ相当の心構えを持って望めば、良い結果が得られるとの感触をえた。より完成度の高いものを目指したい。